

二 後頭禿げたか機會の神

何か會合の席がある。是非に出席せねばならぬとは承知し乍ら、少し位は遅れてもとまでは思はずとも、多少控へ目にして行く。少しでも早かつたら序に之もと他へ向ふ。みんながそんなであつたら、會合は出來はせぬのに、自分一人位はよからうと、自分免許で、悪いと知りつゝ兎角遅參する。他がやつてくれるだらう位の生溫い考。これでは不可ぬ。何ぞ夫れ、自分が行かねば會合は出來ぬ。自分もその一員だと、起つ元氣はないか。「遅れてもよいとは思はぬが、恰度よい頃合を見計ふのだ」と云ふか、その好時機は自分が作らねばならぬ。自分がその氣になれば、何時でも好時機たるを失はぬ。機會の神は後頭は禿つるぢや、前からでなくては掴むことは出來ぬ。

或人が其の朋友を訪問して、暫時客間に控えて居ると、ひどく眠氣を催し頻りに船を漕いでゐる處へ主人が出て來た。客の眠つて居るのをまさかに起すも氣の毒と思ひ、其の儘對座して居るうち、主人も眠氣を催して、とうとう鼾をかいで眠つてしまつた。やゝ暫くして客が目覺ましてみると、主人が熟睡の體である。呼び起すも無禮と心得て、其儘再び眠に就いた。主人も暫時眠つて目を開けてみれば、客はまだ覺めない様子、餘程疲れてござると、主人も再び眠つてしまつた。兎角するうちに、客が三度目に目を開いて見れば、主人はまだまだ眠つてゐる。而も日は早や西山に傾いて、鴉も時を求めて林に歸ると云ふ有様。これはと客は潜かに家を出て歸り、主人は後に眼を覺まして客の居ないのに力を落し、すぐ己の室に歸つた。遂々話もせず御馳走もせず仕舞。あんまり頃合を見計らつて居る間に、折角兩人對座してゐながら、何も出來ぬことになつて了ふ。陸放翁の歌に

相對蒲團睡味長 主人與客兩相忘

須臾客去主人覺 一半西窓無夕陽

とありますのは、此事でせう。

何ぞ、私が参らねば説教は出来ぬ。私が行かねば極樂は潰れる、空家になる。是非とも参らねばならぬ、往かねばならぬと振ひ起たないか。實行者は正しく此の自分でなくてはならぬ。

自分が床の中に樂々と寢て居て、ヤレ起きよソラ起きよと、家族を呼び起したとて、誰も起きるものでない。自分が先づ起きて顔を洗ひ、佛前のお燈明でもあげて、「コレもう起きぬか、頭痛でもするか、お醫者でも呼ばうか」と枕許へ座つて優しく云つて御覽。大抵の者が起きずに居られまい。一人一人が皆その覺悟でやつて御覽、屹度朝顔の花のしかみ面を見ずに濟むから。